

生成 AI 時代における日本語アカデミックライティング：  
複言語使用者の「私のことば」を育む教育実践  
Japanese Academic Writing in the Age of Generative AI: A Pedagogical Practice to  
Foster “My Language” among Plurilingual Learners

杉原由美・伴野崇生，慶應義塾大学  
Yumi Sugihara・Takao Tomono, Keio University

## 1. はじめに

近年、生成 AI の使用が大学教員と学生のあいだに急速に浸透し、学生たちの中には「すべての講義課題に ChatGPT を使っている」という声も聞かれる。その理由として、ある学生は、日本語学習者である自身の日本語文よりもより整った読みやすい文章が短時間で生成されることを挙げており、「タイパ（タイムパフォーマンス）」を重視する現代社会の傾向と合致する。一方で、そのような生成 AI 利用を続けた先に「自分のことば」はどのように育つのかという第二言語教育の問いが浮かび上がる。このような状況において、日本語教育における「自分のことば」育成の意味を再検討することは、喫緊の課題といえよう。

このような現状を踏まえ、本稿では、大学において留学生と帰国生を主対象とする上級日本語クラスでの教育実践を吟味する。当該授業では、日本語アカデミックライティングスキルの伸長をめざして論理的なレポート作成プロセスを学ぶ中で、生成 AI とどのように付き合うかとともに自分らしいオリジナリティのある表現にどのような意義があるのかを追究した。本稿では、授業の内容を記述して履修者のふりかえりをもとに日本語教育における新たな課題と可能性を探究する。結論として、生成 AI 使用について多角的に検討して自分のオリジナリティのある表現の価値に気づくことは、言語学習者がとらわれがちな「完璧なことば」幻想による抑圧から解放して、より主体的な言語使用を促すことにつながる可能性を指摘する。

## 2. 先行研究と本稿の位置づけ

近年、生成 AI 技術がもたらす言語文化教育の新たな可能性とそれに伴う課題についての議論が盛んに行われている。住田他（2024）は、生成 AI の進化は言語文化教育に革新をもたらす一方、常に教員と学習者が共に学び続ける姿勢が求められると指摘している。より具体的には、社会に広く生成 AI が普及する中、教員は学習者が自分のことばで話せるような自律的な学習を効果的に支援することを学び、学習者は生成 AI が出力してくれる「良い」アウトプットを用いる中で完璧主義的になったり自信を持てなくなったりすることを超えて「本当の実力」を養う姿勢が求められるという（住田他 2024）。このことは、言語文化教育は生成 AI に向き合い続ける必要があるということの意味する。さらに、住田他（2024）は特に日本国内の日本語教育現場で日本語のみで授業運営することが当然視され単一言語主義的な教育環境が正当化されてきた点を問題ととらえ、生成 AI 使用によって単一言語主義的なあり方から複言語主義的な言語教育へと移行

する可能性に言及している点が興味深い。生成 AI 使用が複言語主義的な言語教育へと移行させるといってやや語弊があるかもしれないが、生成 AI 使用に教員と学生がともに向き合う言語教育現場では、単一言語主義的な言語使用から複言語主義的なあり方へと変わることが促されるのではないかと本稿の筆者らは考えている。

では、単一言語主義的なとらえ方の何が問題なのだろうか。金・丸田 (2024) は、日本社会で複言語使用者として生きる困難さを、複言語・複文化環境で育った彼ら自身のナラティブ研究によって明らかにしている。より具体的には、彼ら複言語使用者が、育った家庭での使用言語について自分は正当な話者ではないと捉える「ホンモノ幻想」を抱えてしまう問題性を指摘している。その問題には日本社会で単一言語主義が支配的であることが強くかかわっているという。そして、この幻想を乗り越えるための言語教育実践や学習者像の捉え直しが必要だと訴えている。言い換えると、複言語・複文化環境で育った言語教育者である金と丸田が、言語教育者が社会に変革を働きかける力を持った主体として重要な役割を担う可能性を示しているといえよう。類似して、ましこ (2018) は日本列島内で (標準) 日本語だけを国語とし、外国語と英語を同一視するような言語イデオロギーを、日本語/国語/英語教育者が批判的に認識する必要性を強く訴える。田中克彦/イ・ヨンスク/安田敏朗らが繰り返してきた「自明な日本語現象などない」という主張を軸として、むしろ言語教育こそが単一民族による単一言語文化イメージなどの幻想・神話にとらわれていると問題視して、そこからの脱却と人間的解放が必要だとしている (ましこ 2018)。つまり、日本社会に根強く存在する単一言語主義的なとらえ方は、複言語使用者の自己否定感を生み出し、言語的・文化的多様性を抑圧してきたといえる。言語教育者自身がその内面化された単一言語イデオロギーを批判的に問い直し、多様な言語的实践やアイデンティティを正当なものとして承認する視座への転換が強く求められている。

もちろん、言語教育者だけで社会を変革できるわけではない。しかしながら、社会と言語教育現場、そして個人とは互いに強く影響しあっていることは確かである。Douglas Fir Group (2016) は、マクロな社会、メゾレベルの各コミュニティ (教室空間はここに該当する)、マイクロレベルでの個人の相互行為が相互に影響しあう、言語教育の複層的な性質を指摘している。この指摘を踏まえれば、言語教育者が学習者である複言語使用者とともに、単一言語主義的幻想からの解放を言語教育の場で目指すことは重要な意義を持ち得る。実際に教室での実践がマクロな言語観の変化に結びつくには、長期的視座と諸関係者との協働が必要となる。とはいえ、授業を通じた言語実践の検討や語り直しは、複言語使用者の自己認識を変え、長期的には社会的な言語イデオロギーの再考に寄与しうる出発点になるだろう。

以上の議論を踏まえ、本稿の筆者らは、生成 AI 使用に教員と学生がともに向き合い、単一言語主義的な言語使用から複言語主義的なあり方への移行を志向する授業実践を試みた。具体的には、留学生と帰国生を主対象とする上級日本語ライティングクラスで、学生が生成 AI との付き合い方と自分のことばの育成に向

き合う授業実践を行った。本稿ではこの授業報告を行って、日本語教育の課題と可能性を探究する。

### 3. 授業実践の概要

本稿で対象とする授業は、本稿筆者らの勤務校での2025年春学期「日本語スキル2W（レポートの書き方：発展）」であり、1週間に90分の授業が15週にわたって行われた。本稿筆者らはともに当該授業のための教材作成を行ったうえで、杉原が授業を担当した。

日本語スキル2レベルの授業は、日本語を使った講義科目に主体的に参加し、内容を深く理解して成果を十分に表現・発信することを目指して開講されている。当該授業では、以下の4点を目標とした。(1)論証型レポートの基本を理解し、適切な引用を活用しながら論理的に構成する力、(2)レポート作成の各段階を実践し、読み手の視点を考慮してレポートを推敲し完成度を高める力、(3)複数言語を高度に運用する日本語使用者としての自分の特徴を理解し、自分らしいオリジナリティのある表現を用いて明確に伝える力、(4)生成AIを適切な形で活用する力について検討し、日本語学習の観点から意味のある付き合い方を模索する。

表1は、当該授業の15回分の内容を示したものである。授業期間の前半では、論証型レポートの基本を学びながら自分のオリジナルな表現への理解を深め、後半ではレポート作成の各プロセスを学びながら3000～4000字程度のレポートを執筆した。テーマは「複言語使用者としての私のことば」である。表2に、履修者の最終レポートのタイトルの例を示す。

表1 授業内容

授業回	内容
第1回	論証型レポートとは
第2回	パラグラフライティングの基本
第3回	引用の基本
第4回	生成AIの使用①大学の生成AI利用に関する告知を理解する、生成AIとのつきあい方を考える
第5回	私のことば①自分らしいオリジナリティのある表現とは？その意義は？
第6回	私のことば②言語の多様性と複言語使用者、「日本語上手ですね」マイクロアグレッション
第7回	私のことば③CEFRの複言語主義、複言語使用者である私の日本語使用ミニレポート
第8回	レポート作成①レポートの構成・トピック設定
第9回	レポート作成②アウトラインをつくる、生成AIの使用②生成AI使用のガイドライン作成
第10回	レポート作成③本文を執筆する、論理的に文章を展開する際に役立つ表現
第11回	レポート作成④発表準備のレジュメ作成
第12回	レポート作成⑤レポート内容を発表&対話
第13回	レポート作成⑥レポートのピアレビュー
第14回	レポート「内容」について小グループ意見交換・まとめ

表 2 履修者の最終レポートのタイトル例

番号	タイトル
1	言語習得における「完璧」は「完全な壁」？—不完全さを抱えながら世界とつながる言語能力—
2	間違える私、育つことば—複言語使用者にとっての言語不安と自己認識の変容—
3	見た目で判断されるということ—日本で暮らす白人外国人としての違和感とマイクロアグレッション—
4	「正しい日本語」の言説とその影響 — 「典型的な」日本人から外れる見た目と日本語—
5	言語が造形する人格 —複言語使用による性格の違いと社会的役割—
6	内言語 vs. 外言語 — 「考える言語」とその影響—

番号 1 から 4 は、2 年後期生～4 年生の最終レポートタイトルであり、社会との関係を論じている。番号 5 から 6 は、比較的入学から日の浅い 1 年生のタイトルで、自分の言語について論じる傾向が見られる。

#### 4. 日本語教育における課題と可能性の探究

当該授業では日本語アカデミックライティングスキルの伸長をめざして論理的なレポート作成プロセスを学ぶ中で、生成 AI とどのように付き合うのか、さらに自分らしいオリジナリティのある表現にどのような意義があるのかを学生とともに探究した。以下では、4.1 生成 AI とどのように付き合うのか、3.2 自分らしいオリジナリティのある表現にどのような意義があるのかについて、授業内容を詳しく記述する。そのうえで、3.3 において履修者が期末にふりかえりとして記載した内容をとりあげ、日本語教育における課題と可能性を探究する。

##### 4.1 生成 AI とどのように付き合うのか

新学期が落ち着き授業内容がある程度進んだ第 4 回目と、最終レポートの執筆に入る前の第 9 回目のタイミングで、生成 AI の使用をテーマとした。

第 4 回では、履修者一人一人が自分の日常での生成 AI 使用をふりかえって共有した。そして、大学による「ChatGPT 等生成 AI の利用について」（慶應義塾大学 2023）などの学生に向けた告知を解釈して、3 名程度のグループで話し合ったうえで、全体でディスカッションした。さらに、「生成 AI とのつきあい方を考える」という文章を読んだうえで、「私たちは生成 AI とどのようにつきあっていけばよいか」というテーマで 400 字程度の小論文を書いた。

第 9 回では、当該授業での生成 AI 使用について、どのような使い方が適切あるいは不適切か、その条件も含めて小グループで検討した。倫理・公平性・学習効果と効率・成績と評価など多角的に考え、全体でディスカッションした。その後、再度小グループに分かれて合意可能な AI の使用ルールや枠組みをガイドラインとして文章化した。3 つのグループのガイドラインはそれぞれ特色のあるものとなった。授業後に 3 つのガイドラインを統合して教員が文章化することで叩

き台とした。それを次週にクラス全員で再度討議することを通じてガイドラインを完成させた。この生成 AI 使用のガイドラインを表 3 に示す。

表 3 当該授業での生成 AI 使用のガイドライン

<p><b>1. 学習効果(授業全体の目的・主旨との整合性)</b>  <b>調べごとのためのツールとしての使用：</b>生成 AI を辞書や文法解説書のように使うこと、例えば、文法・文型や語彙・表現などの説明を AI にさせることは問題にはならない。ただし、AI は「もっともらしい嘘(ハルシネーション)」を出力する可能性があり、注意が必要である。  <b>推敲のためのツールとしての使用：</b>この授業ではレポート文章作成のプロセスを通じた学習が重視されている。そのため、誤字・脱字の指摘を含めて生成 AI に文章を修正させてはいけない。例えば、「このファイルの誤字脱字を指摘して、修正案とともに示して」や「以下の文章をよりよく書き直して」といった指示がこれに該当する。</p>
<p><b>2. 書き手の主体性(書き手が責任を持つことのできる範囲での使用)</b>          書き手はその文章に責任を持つ必要がある。文章全体を AI に書かせることが問題であることは言うまでもないが、それだけではない。AI の出力結果を user/書き手自身が主体的に検討・検証できることも非常に重要である。よって、書き手自身が読むことのできない言語で書かれた参考文献を AI に翻訳させて引用してはいけない。</p>
<p><b>3. 読み手の主体性(読み手による検討・検証に開かれた書き方)</b>          AI を使って資料を検索すること(調べごとのためのツールとしての使用)自体は問題ないが、AI の出力結果そのものを参考資料とすることは避けるべきである。言い換えると、AI が出力した内容をレポートに引用したり、自分の考えであるかのように書いてはいけません。理由は 2 つある。まず、自分の考えと他者の考え方とは分けて書く必要があるからである。そして、AI の出力結果をレポートに引用したり反映したりした場合、読み手はその内容について確認や検討を行うことができないからである。</p>
<p><b>4. 成績評価・公正性(他の学生の負担やアウトプットの質との関係・比較において)</b>          成績評価の基準に示されていることに AI を使ってはいけない。例えて言えば、数学のテストで計算機を使った学生と使っていない学生とで成績・評価に差がつくようなものであり、公平性の面でも問題がある。成績評価の基準として(例えば、ルーブリックなどの形で)示されていることは、AI を使わないことを前提としているというだけでなく、そのプロセスを教員とも共有しながら、書き手自身が頭を使いながら進めていくことが求められている。</p>
<p><b>5. 本ガイドラインに書かれていないことについて</b>          本ガイドラインに書かれていないこと、本ガイドラインの記述からでは判断が難しいと思われることで生成 AI を利用した場合には、どのように利用したのかをレポート末尾に明記すること。なお、本ガイドラインは、2025 年度春学期の日本語スキル 2W(レポートの書き方(発展))のためのものである。その他の科目や研究のための利用については、このクラスでの経験を活かしてあらためて別途考えて欲しい。</p>

#### 4.2 自分らしいオリジナルの表現にはどのような意義があるのか？

第 4 回で生成 AI 使用について検討した後、第 5～7 回目の 3 回にわたって自分らしいオリジナルの表現にはどのような意義があるのか、様々なリソースを用いながら検討していった。

第 5 回では、自分らしいオリジナルリティのある表現とはどのようなものなのか、教員 2 名によるサンプルレポートがどのような形でオリジナルリティを出そう

としているのか、グループディスカッションを行った。サンプルレポートのタイトルは「自分のことばを追求するプロセスの重要性—多様な日本語使用の尊重はどのように実現されるのか」「生成 AI 時代における言語使用に求められる態度—「計画的偶発性理論」を手掛かりに」である。さらに、多様な角度から「私のことば」について論じた5つの文章を読んでコメントを LMS にポストしあう活動を行った。5つの文章は、履修者が最終レポートとして書く字数でどれくらいの内容を盛り込めるのかイメージしやすいように、細川英雄（2021）・温又柔（2018）・李琴峰（2025）・多和田葉子（2012）・リービ英雄（2010）をそれぞれ 3000 字前後の量で抜粋したものである。

第6回は、「日本語＝日本文化＝日本人」というような固定的なとらえ方の批判的捉えなおしを意図して、言語の多様性と複言語使用者についてディスカッションを行った。そのうえで、慶應義塾大学の学部生が発行している『慶大塾生新聞』の記事「『日本語上手ですね』が持つ小さな攻撃性」（飯田・高梨 2025）を読んで、外国ルーツの学生に対する「日本語上手ですね」という発言に潜むマイクロアグレッションについて検討した。宿題として各自が 400 字程度の小論文を書いて、次週にペアで共有した。

第7回は「複言語使用者としての私の日本語使用」というテーマで、欧州評議会（Council of Europe 2007 他）の複言語主義に関する文章を読み、グループで解釈しながら複言語使用者である自分自身のことばおよび日本語の使用について話し合った。宿題として上記のテーマでミニレポート（800 字）を書き、次週にペアで共有した。

以上のように、種々のリソースを手掛かりに「複言語使用者としての私のことば」というテーマについて検討を重ねたうえで、第8回目からは 3000～4000 字程度のレポートを執筆していった。

### 4.3 日本語教育における課題と可能性

では 4.1 と 4.2 の活動を通じて履修者はどのようなことを学んだり得たりしたと考えたのか。履修者 13 名が期末に記述したふりかえりをまとめると、以下の 5 点が特徴として浮上した。

- ・日本語に対する自信の変化：文法的な正確さを重視して AI や他人に頼っていたが、自分の言葉で表現する楽しさを発見し、日本語で書くことへの自信がついた。
- ・オリジナリティの意義への気づき：「ネイティブ」のような「完璧な文章」をめざすのではなく、日本語学習者や帰国生である自分だからこそ書ける文章の価値を理解した。
- ・主体的な表現への転換：客観的な事実の羅列から、自分の経験や考えを反映させた主観的な表現に価値を見出し、レポート作成を楽しみを感じるようになった。
- ・自己肯定感の向上：自分自身の言葉や個性を探究して評価される中でありのままの自分のことばへの受容が高まった。

- ・テーマの適合性：複言語使用者である自分の経験と一致するテーマが授業で扱われたため、会話は苦手だったがクラスメイトとの意見交換に積極的に参加できた。

まとめると、4.1と4.2の活動を通じて、履修者は日本語に対する自信を高め、オリジナリティのある表現の価値に気づいた。その結果、主体的な表現が可能となり、レポート作成を楽しんでいると感じることで自己肯定感が向上した。また、自分自身の経験に合ったテーマに取り組むことは、積極的な意見交換への主体的な参加を促したといえよう。

以上の13名の学びや気づきをより具体的に理解するため、自分自身の変容を詳しく記述していた3名のふりかえりを部分的に抜粋して簡潔化した文章を以下に示す。Aは非漢字圏からの留学生、Bは漢字圏からの留学生、Cはいわゆる帰国生である。自分のオリジナリティのある表現の価値に気づくことによって、Aは書き言葉に関する不安、Bは完璧な文章の追求、Cは学術的な文章を過度に意識することから解放されている様子が見える。

- A：授業を受ける前は日本語に自信がなく、特に書くことに不安を感じていた。レポート提出前には必ず生成AIか友人に文法を確認してもらっていたため、文章が個性的でなくなり、つまらないものになっていた。しかし、今は他者やAIに頼らず、自分で文法を確認し、言いたいことを自分の言葉で表現している。この変化によって、客観的で正確な文章を書こうとしていた以前とは違い、自分の経験や考えを入れた自分らしい表現で書くようになり、レポート作成が非常に楽しくなった。
- B：外国人留学生として、自分の言語能力が完璧でないことを知っていたため、オリジナリティよりもネイティブが書きそうな完璧な文章を追求していた。しかし、この日本語授業を通じて、日本語学習者である自分だからこそ書ける文章こそが真の「私の言葉」であり、価値があることに気づいた。
- C：授業の初めは、オリジナリティという概念の理解に苦労した。ユニークさは間違いだと考えていたためだ。高校時代の帰国子女コンプレックスから、学術的な言い回しを過度に意識していた。しかし、他のクラスメイトの個性的な文章と自分の文章を比較するうちに、漠然としたオリジナリティの概念を理解することができた。「文の柔らかさ」や「言い回し」に個性を感じるようになって楽しかった。今後は「帰国子女」であることや理系の知見など、他の要素とうまく組み合わせることで生まれる自分らしさを受け入れていきたい。

## 5. 今後の課題

本稿で示した授業内容をより洗練すること、また生成AI使用を検討して自分のオリジナリティのある表現の価値に気づくための授業運営については様々なあり方が考えられるため、その探究を引き続き行っていくことが今後の課題である。さらに、自分らしいオリジナリティのある表現を育成していくことと並行して、生成AIの意義ある積極的活用を学生とともに追求する授業も別に展開する必要を感じている。つまり、バランスをとりながら教員と学生がともに「生成

AI に向き合っていく」日本語コースを全体としてめざしたい。加えて、本授業で作成した教材を中級や初級レベルにどのように応用できるのか検討していきたい。

### 参考文献

- 飯田權・高梨怜子 (2025) 「『日本語上手ですね』が持つ小さな攻撃性」『慶大塾生新聞』 <https://www.jukushin.com/archives/65096> (2025年8月28日閲覧)
- 温又柔 (2018) 『台湾生まれ日本語育ち』白水社
- 金志唯 (神谷志織)・丸田健太郎 (2024) 「複数言語話者が抱える『ホンモノ幻想』当事者の語りからの考察」『言語文化教育研究』第22巻190-210
- 慶應義塾大学 (2023) 「ChatGPT 等生成 AI の利用について」  
<https://www.students.keio.ac.jp/com/class/registration/chatgpt.html>  
(2025年8月28日閲覧)
- 住田 哲郎・山中 司・牛窪 隆太 (2024) 「生成 AI 時代の言語文化教育を考える—新たなアプローチと課題の模索」『言語文化教育研究』第22巻273-285
- 多和田葉子 (2012) 『エクソフォニー——母語の外へ出る旅』岩波書店より
- 細川英雄 (2021) 『自分の〈ことば〉をつくるあなたにしか語れないことを表現する技術』ディスカヴァー・トゥエンティワン
- ましこひでのり (2018) 「第2章 言語教育／学習の知識社会学グローバル化における「バベルの塔」と日本列島上をおおう言語イデオロギー」佐藤慎司・村田晶子 (編著) 『人類学・社会学的視点からみた過去、現在、未来のことばの教育』三元社
- 李琴峰 (2025) 『日本語からの祝福、日本語への祝福』朝日新聞出版
- リービ英雄 (2010) 『我的日本語 The World in Japanese』筑摩書房
- Council of Europe. (2007). *From linguistic diversity to plurilingual education: Guide for the development of language education policies in Europe (Main version)*.  
<https://rm.coe.int/CoERMPublicCommonSearchServices/DisplayDCTMContent?documentId=09000016802fc1c4> (2025年8月28日閲覧)
- Douglas Fir Group. (2016). A transdisciplinary framework for SLA in a multilingual world. *Modern Language Journal*, 100-S, 19-47.